



## 「教職大学院の強みと配慮すべき事項」

教職実践専攻（教職大学院）

准教授 三浦 亨

昨年度本院に赴任し、1年と半年が過ぎました。この度、「鐘の音」に寄稿する機会をいただきましたので、この1年半を振り返りながら、私が感じている教職大学院の「強み」と「配慮すべき事項」を述べたいと思います。

### 強み①：少人数の構成により、個に応じた指導がなされている

教職大学院は、ストマス 20 名（1 年次 10 名、2 年次 10 名）、現職院生 16 名（1 年次 10 名、2 年次 6 名）という少人数で構成されています。

そのため、指導教員 1 人が受け持つ院生はおおよそ 3～4 名程度になり、個々の院生の状況を把握しやすく、個に応じた指導を図りやすいのがメリットだと思います。

### 強み①の反面（配慮すべき事項）

一方で、個々の院生への指導（例えば、修了認定に向けた実践研究への指導など）は、主担当教員と副担当教員に任せられるわけですが、両者の連携（情報の共有）をしっかりと図っていく必要があると感じています。

また、精神面、健康面などで配慮を要する院生が生じた場合の対応も指導教員（主に主担当教員）に任せられるわけですが、その際の基本的な指導方針（対応の考え方）も共有する必要があるように思います。

### 強み②：ストマスが現職院生から教師としてのものの見方・考え方を学んでいる

上記 30 名の院生を三つの部屋に分けているの

ですが、ストマスと現職院生を混成して配置しています。これにより、各部屋は職員室のような雰囲気を作られており、時々様子を見る中でも、とても良い雰囲気が感じられます。院生室での何気ない会話の中から、ストマスは現職院生から教師としてのものの見方・考え方を学んでいるようです。

このことは、ストマスに対してメリットとなるだけでなく、現職院生にとっても、これまでの自己の実践を振り返り、整理する契機となっているようです。

### 強み②の反面（配慮すべき事項）

一方で、今年の様子を見ると、2 年次ストマス（M2）が県や附属小の臨時講師等を多く引き受けており、院生室に彼らがいる姿をあまり見かけなくなっていました。彼らにとっては、採用前に現場経験を積み、即戦力となる実践的指導力を身に付ける良い機会なのだと思いますが、これによって、教職大学院のメリットであるはずの、院生室において実務家教員から学ぶ機会が減ってしまったように思います。

これは実は、2 年次ストマス（M2）から 1 年次ストマス（M1）に、院内での様々なことを引き継いでいく（伝達する）ことが滞ることにもつながります。

### 強み③：実務家教員から「現場感覚」を大切にされた指導助言がなされている

学校は、組織で動いています。そのことをスト

マス院生に実感してもらうためには、指導教員側も組織で動く必要があると思います。大学としてのリベラルな体制を維持しつつも、「現場感覚」をよりしっかりと院生たちに伝えられる指導体制を築くことが求められます。

例えば、学校では当たり前に行われている週予

定・月予定などで院内の予定やお互いの動向を把握すること、これも学校では当たり前に行われている朝の短時間の打合せを指導教員と院生（代表）との間でセットし連絡事項等をより確実に伝達すること、などのタイムマネジメントが必要に思います。

## この道

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 奥 瑞生

拓郎、陽水、荒井由実、かぐや姫、チューリップ、オフコース、さだまさし……は、私が高校、大学に通っていた頃に続々と世に出てきた、いわゆるシンガーソングライターと呼ばれる人たちです。とりわけ、曲に刻まれている“若者だからこそ書けるであろう”感性豊かな歌詞には当時大いに驚かされ、心が揺さぶられたものです。

先日、NHKBS放送で小田和正さんのライブが放映されていたので、音量を大きくして画面に見入っていました。まあ！相変わらずのハイトーンな澄んだ声。ストレートに愛を歌う曲の数々。これが今年72歳になった方の歌声かと改めて驚かされました。

「人はいかに生きるべきか」について、迷うことがあります。しかし、その答えは自分自身に問うことで見つけなくてははいけません。小田和正さんの一曲は、そのことを考えさせてくれることでしょう。

今、教職大学院で日々研鑽を積んでいるストマスの皆さんにご紹介したいと思います。この歌から感じることを大事にしつつ、あなたが目指そうとしている教師像への新たな決意と志を胸に、前へ前へと進んでいって欲しいと願っています。

この道を  
作詞・作曲 小田和正  
それでもけんめいに 生きていくとそう決めた

繰り返す迷いも 争いも悲しみも  
すべてを時に任せて 選んだ道を行くその道は  
どこへと つながっていくのか  
未だ見ぬその場所は どんな風が吹くんだろう  
誇りと正義のために 戦う自分がいるはず  
晴れわたる広い空に 明日が確かに見える  
どんなに険しくとも この道を信じて行く  
守るべきもの それはただひとつ それを知った

(JASRAC 相談済)

あなたが教師として歩もうとしている「この道」。もしかして、「誇りと正義のために 戦う自分がいるはず」のフレーズは、

「教育への誇りと子供の幸せのために 戦う自分がいるはず」

に聞こえているかもしれませんね。

あなたが守るべきもの……それは……？  
教育は飽くなき理想の追求です。

私は、

「いつか晴れわたる広い空に あなたの明日が確かに見える」

ことを信じて応援しています。

## 教職実践インターンシップ I

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生 1 年次 飯澤 玲央

教職実践インターンシップ I は学部卒院生 1 年次を対象とした実践実習科目であり、理論と実践との往還を進める上で中核となる科目です。教員としての高度な専門性を身に付けることを目的として、学校現場で継続的に実習と省察を行います。

前期の実習は附属四校園において 2 日ずつ実施し、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校それぞれの現状と課題を知りました。秋田大学では附属四校園が同一敷地内にあることが特色の一つであり、その強みを生かした実習でありました。私は各校種における教師と児童生徒との接し方や児童生徒の実態の違いを学ぶことができました。

後期の実習は、それぞれの院生が希望する附属四校園または高等学校において授業実践を中心に教員としての仕事を体験しています。加えて各自が自らの研究テーマを踏まえ、授業に取り組み、実践力を磨いています。

四校園の実習の中で、幼稚園でのインターンシップが新鮮でした。幼稚園では、子どもの些細な変化やできたことなどに気付き、頻繁に褒めていることが印象的でした。褒めることで自己肯定感

を得て、様々なことに取り組んでみようという気持ちも芽生えます。この時期は新しいものに触れる機会が多々あります。それらの機会を先生が逃さず見ることで、子どもの変化に気付き、関わることでしっかり自分のこと見てくれているという安心感が生まれ、子どもとの信頼関係が築かれます。

これは、幼稚園に限った話ではなく、全ての校種に共通して言えることができると思います。今までも子どもをよく見るように指導されてはいましたが、今回インターンシップで幼稚園に実習させていただくという機会をいただいて子どもを見る重要性を実感することができました。これは当たり前のことではありますが、一人で約 40 人の学級を持ち、一人ひとりを見るということは簡単ではありません。今回の経験から、今後の実習、教員生活において子どもを見ることを強く意識できるようになりました。後期の実習では実践力の一つである子どもを見る目を養うことを自分の目標にして取り組んでいこうと思います。

## 「教職実践インターンシップ II を振り返って」

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生 2 年次 山口 裕平

本院の学部卒院生は、2 年間を通じて学校現場で授業実践や学校経営等を学ぶ「教職実践インターンシップ」というものがあります。1 年次は附属 4 校園で、2 年次は秋田市内の公立学校（連携協力校）でインターンをさせていただいています。授業実践を中心に自らの研究を進めつつ、児童生徒や先生方との関わり合いから多くのことを学ぶ

ことができ、本教職大学院での「理論と実践の往還」がなされた取り組みとなっています。

私は、今年度秋田市内の高校においてインターンをさせていただいております。授業実践では、私自身の授業力の無さを痛感する部分は多々ありますが、指導教員の先生や大学院の教授方からご指導をいただき、日々授業改善を図ることができ

ています。こうしたリフレクションがあるからこそ、理論と実践がスパイラルのような形となって、私の授業力の向上につながっていると肌で感じています。引き続き授業力の向上に努めるとともに、研究テーマの検証を行っていきたいと思います。

また、一日の学校の流れを現場の先生方と過ごしたり、学校行事にも参加させていただいたり、チーム学校の大切さを学ぶことができています。具体的には、各分掌部内や学年部会での共通認識と共通実践です。職員室では、先生方が色々な業務について話し合い、確認し合う場面を多く見ることができました。私自身も分からないで終わらせず、近くの先生方に聞くなどして、教員同士のコミュニケーションを大切にしていきたいと思

ました。こうして、学校現場に身を置く前に、多岐にわたる校務を経験できたことで、見通しをもって来年度から教員生活を送ることができると考えています。

以上のように、「教職実践インターンシップⅡ」では貴重な学びや経験をさせていただいております。実際には、このインターンを通した一番の学びは生徒との関わりだと思えます。多様な生徒がいる中で「この生徒の困り感は何だろう」という生徒に寄り添いながら、生徒ともに成長していける教員になりたいと思います。大学院卒業までにたくさんのインターンを積み、教員としての資質を高めていきたいです。

### 納涼祭を終えて

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 照井 達也

前期の授業が終了し、大学会館2階研修室にて納涼祭を行いました。納涼祭では、大学院の先生方や現職院生の先生方、学部卒院生の先輩方・同期の人たちと前期を振り返りながら歓談をしたり、今後の研究のことについて熱く語り合いをしたりしました。また、武田先生からは「リサーチクエスチョンとは？」というお話をいただきました。お話を要約すると「リサーチクエスチョン」の「リサーチ」とは「研究」を示しており、「クエスチョン」は「疑問」や「課題」を意味するということでした。「リサーチクエスチョン」を論文に置き換えてみると、論文の根底に流れる「問い」と解釈することができるそうです。例は次のようになります。リサーチクエスチョンを「日本で少子化が進んでいるのはなぜか」と設定すると、論文の目的は「日本における少子化の理由を明らかにする」となり、仮説は「産休制度が充実すれば、少子化が改善される」、結論は「産休制度の拡充により、少子化が

改善される可能性が示唆された」とすることができます。このお話のおかげで私の「研究課題」に対する意識を今までよりも強く持つことができ、さらに研究に意欲的に取り組むことができたと思います。

私の前期の生活を振り返ると、大学院の授業や附属4校園を2日間ずつ回るインターンシップを行いながら、教員採用試験の勉強に励みました。なかなかのハードスケジュールではありましたが、今後の人生に生かすことができるような経験や学びが多かったと思います。また、このような忙しいスケジュールの中でも「ワーク・ライフ・バランス」を大切にし、趣味のひとつである筋力トレーニングを欠かすことなく行いました。反省点としては、ワークよりもライフに重点が置かれてしまったことです。後期からはワークの方にもっと重点を置くことができるように改善していきたいと思



リサーチクエストについて語る武田先生



納涼祭開始！



一ネタ終えて安堵の乾杯をする古内先生  
と山口裕平さん、高橋峻介さん



将来について熱く語る澤木瑛保さん

### あきた惟蔭の会

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生2年次 長谷川 いずも

10月12日、「あきた惟蔭（いぶき）の会」が開かれました。あきた惟蔭の会とは、秋田大学教職大学院の発展に寄与することを目的とした会で、総会の開催をはじめとした様々な事業を行います。秋田大学に教職大学院ができてから今年で4年目となり、様々なことが順調に機能していくようになった中で、このような会がさらに私たちの研究や実践の後押しをしてくれることをとてもうれしく感じています。

今回の総会では会則の説明、役員の任命、事業計画についての説明のほかに交流会がありました。交流会では卒業生から現場についてお話を聞きました。教職大学院で学んだことが、現場に戻ったとき、出たときにどう活かされるのかを知ることができるのはとてもありがたい機会です。

昨年カリキュラム・授業開発コースを卒業した保坂迪菜さんの発表では、教職大学院で担当としていた総務班について触れ、そこで得たことが現

場でどう活かされたかについての内容でした。総務班とは、フォーラムの運営など普段から大学院生の中心に立つ存在です。私も今、総務班の一員として日々奮闘しています。昨年は、迪菜さんからいろんなことを教えてもらいました。迪菜さん自身もやるべきことがあるなかで、見通しを持って仕事をこなしていく姿に感銘を受けていました。2年間やってきたことが、現場に出たときに違う形となって自分のスキルとなること、あの時こうすればよかったと振り返らずに今を頑張ることを

発表の中で聞きました。

今までの行動や想いが、これからの人生にも深く関わっていくことを知ることができました。今自分ができることを責任もって行動し、来年から新たな環境の中で頑張りたいと思える機会でした。また、今年是我が、次の学年に引き継ぎをする番です。後輩に来年から頑張ってもらうために、少しでも不安を無くすことができるように丁寧に伝えるようにしたいです。

## 第7回 あきたの教師力高度化フォーラム 基調講話

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生2年次 渡辺 雄介

あきたの教師力高度化フォーラム第1部では、宮城教育大学の安藤明伸先生より「プログラミング教育で子どもたちにどのような力をつけさせるのか」についてご講話をいただきました。学習指導要領の改訂により新しく教育課程に盛り込まれたプログラミング教育について、指導に不安を抱いている教育関係者も多いのが現状ではないかと思えます。今回の講話では、プログラミング教育のねらいや特性、実践例などについてお話していただきました。

小学校でのプログラミング教育の実施にあたっては、まずコンピュータを活用する楽しさや面白さ、ものごとを成し遂げる達成感を子どもたちに味わせることが重要であるとのことでした。楽しさや面白さを味わうことによってプログラムのよさ等への「気付き」を促し、コンピュータ等を活用する意欲を喚起することができます。さらに、学習活動への意欲の高まりは、「プログラミング的思考」の育成や各教科等の学びの充実へとつながります。プログラミングは、いわゆるアクティブラ

ーニングと相性の良いものでもあるため、学校・クラスの実態に即して「プログラミング的思考」の育成を適切に組み入れていくべきであるとのことでした。

私自身もこれまで学校現場でプログラミング教育の実践をいくつか見る機会がありました。学校や地域によって差はあるかとは思いますが、ここ数年間で機器や設備などのハード面では普及が進みつつあるように感じます。また、教材(ソフト)も操作が簡易で子どもたちにとって抵抗の少ないものが増えてきている印象です。しかし、課題として教師側の指導の経験が少なく、授業内で十分に指導性が発揮されていないケースがある点が挙げられると考えます。子どもたちにプログラミング的思考を意識させるような言葉かけや、コンピュータのことを理解させるための指導、プログラムのよさ等への気付きを促す授業展開といった教師の働きかけがますます重要となってくるでしょう。



受付に意気込む照井佳那子さんと  
長谷川いずもさん



基調講話

### まずは食べてみる

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 遠藤 史都

2019年10月12日(土)に秋田市文化会館で「第7回あきたの教師力高度化フォーラム」が開催されました。その第2部では「これからの秋田のプログラミング教育を考える」をテーマにして、林良雄先生をはじめ、廣田千明先生、大久保武彦先生、安藤明伸先生をパネラーとしてパネルディスカッションが開かれました。

このパネルディスカッションのなかで印象的だった言葉があります。それは、プログラミング教育の「食わず嫌い」です。2020年度から必修化されるプログラミング教育ですが、正直「何をすればいいの?」「何のためにやるの?」「どんな成果が得られるの?」などといった疑問が残っている人も多いと思います。このようにプログラミング教育をなかなか実践しようとしないうことを、パネルディスカッションの場では「食わず嫌い」と表現されていました。この表現は的を射ていると思います。なぜなら、私自身もプログラミング教育を「食わず嫌い」していたからです。「プログラミング教育…?本当にそれって必要なの?もっと別な

教科等に時間を使えばいいんじゃないの?」などと、プログラミング教育について斜めに見ていました。

しかし、このパネルディスカッションを通して、この見方はすぐに改めなければならないと感じました。プログラミング教育は誕生して間もない教育です。そのため実践例が少なく、実際にどのようなことを通して、どのような力がつくのか、具体的にイメージすることが難しいのは当然のことです。それだけの理由でプログラミング教育を「食わず嫌い」してしまっただけでは実にもったいないです。

そこで、私はプログラミング教育を積極的に実践していきたいと考えるようになりました。私はまだ20代の若者です。教育に関してベテランの先生方のようなノウハウは全くありません。だからこそ、新しいものを積極的に取り入れていく必要があると思うのです。失敗してもいいから、まずはやってみる。このチャレンジ精神を若者である私の強みにして、プログラミング教育の発展に携わっていきたいです。



パネルディスカッション



質問をする高橋峻介さん

令和元年度 第1回学校組織マネジメント指導者養成研修  
教職大学院4県合同リフレクションについての感想

学校マネジメントコース

現職院生1年次 大山 正道

○異なる大学、異なる年齢層の方々と当日の研修について感じたことを共有したり、意見交換したりすることができて、とても有意義な時間となった。研修終了後すぐのリフレクションだったので、研修内容がまだ未消化の状態が多かったが、積極的に思いを話すことができた。貴重な場所と時間を確保していただき、感謝の気持ちでいっぱいである。

学校マネジメントコース

現職院生1年次 加賀谷 武英

○自分の学びを振り返り、言葉にすることと、他大学院の先生方から話を聞いて、視点や感じ方の同一性を感じたり違いを感じたりする中で一日の学びを省察することができたと思う。毎日メンバーを変えながらグループワークを進められるよう配慮いただいたことで、たくさんの先生のお話を聞くことができ、貴重な経験となった。

学校マネジメントコース

現職院生1年次 菊地 良

○リフレクションの中で、研修内容を振り返り、OUTPUTすることで、今日の学びが確かめられるよい機会だったと思われる。また、他の人の学びを聴くことで、自分との視点の違いや捉え方の違いに気付くことができ、考えの広がりをもつことができたのは収穫だった。短時間ではあったが（短時間だからこそよかった）たくさんの人と意見の交流ができてよかったと思う。

学校マネジメントコース

現職院生1年次 齋藤 雅子

○他県の教職大学院の方々と一緒にリフレクションをすることで、課題の種類や、対応に関する情報の



幅が広がり勉強になった。また毎日の講義や演習が、自分の設定した課題にどのようにつながるのかを確認することができ、有意義だった。ただ毎回自己紹介をしなければならず、毎回緊張気味で、十分に自分の思いを話せなかったかもしれない。

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 仙道 英悦

○実際に言葉にしたり書き表したりしたことで、その日の学びを確認することができた。咀嚼しきれなかった部分を、他の大学院生の振り返りから学び直すことができたことも有意義であった。同じメンバーでももう少しじっくりと関わりたいと感じることもあったが、様々な立場の方々と意見交流をすることで、その日の学びを多様な視点から再考察することができた。

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 橘 義憲

○一日の学びを振り返って言葉にして話すことで、自分の学びが整理されていくような感覚を覚えた。他県の先生方と話をすることで、様々な点において視野が広がったと思う。他県の先生方は、主にミドル世代だと感じたが、世代の違いや研究テーマによる視点の違いなどがあり、もっと掘り下げて話をすることができればよかったと思った。

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 時田 航

○他の大学院の大学院生と一緒にリフレクションを行うことは、自分の一日の学びを振り返り理解を深めることができたという点でよかったと同時に、さまざまな県・校種の先生方の多様な見方や考え方に触れ、それについて自分の考えを持ち意見交換でき、非常に有意義なものとなった。短時間で行うことができたのも、時間を効率的に使うことを考えるという点でよかったと考える。



講義を受ける先生方



校種ごとの班に分かれた協議

## 今後の行事予定一覧

- 
- 2019年
- 11月 2日(土) 秋田大学大学院教育学研究科説明会
  - 11月 7日(木) 算数・数学指導力向上研修会
  - 11月 9日(土) 集中講義「学校学級経営の現状と課題」
  - 11月 12日(火) 国語指導力向上研修会
  - 11月 23日(土) 令和元年度秋田県学力向上フォーラム in 大仙市
  - 11月 26日(火)～29日(金) 言語活動指導者養成研修
  - 11月 30日(土) 集中講義「学校危機管理の現状と課題」
  - 12月 7日(土)・8日(日) 令和元年度日本教職大学院協会研究大会
  - 12月 13日(金) 全県指導主事等連絡協議会
  - 12月 21日(土) 秋田大学大学院教育学研究科第Ⅱ期入学試験
  - 12月 26日(木) 忘年会
- 2020年
- 1月 7日(火) 研究概要発表会
  - 1月 10日(金) 道徳教育パワーアップ協議会
  - 2月 4日(火) 教職実践オープンリフレクション事前発表会
  - 2月 6日(木)・7日(金) 秋田県教育研究発表会
  - 2月 14日(金)・15日(土) 教職実践オープンリフレクション
  - 3月 24日(火) 学位授与式